

令和元年度第2回愛知県環境審議会専門調査員協議会 会議録

1 日時

令和2年2月13日(木) 午後2時から午後4時30分まで

2 場所

愛知県東大手庁舎 1階 あいち環境学習プラザ セミナー室

3 出席者

(1) 専門調査員

植 物 部 門：加藤専門調査員、福岡専門調査員、瀧崎専門調査員、中村専門調査員、
村松専門調査員

動 物 部 門：岡田専門調査員、服部(伸)専門調査員、水野専門調査員

地形・地質部門：中尾専門調査員、原瀬専門調査員、森専門調査員、山岡専門調査員、
吉田専門調査員

(以上13名)

(2) 事務局

愛知県環境局環境政策部自然環境課：大橋主幹、小川課長補佐、清水主査、河野技師、矢島主事
尾張県民事務所 知多県民センター環境保全課：原田主任主査

西三河県民事務所環境保全課：阿久津主査

東三河総局環境保全課：加藤主査

東三河総局 新城設楽振興事務所環境保全課：峯田主査

(以上9名)

4 議題

(1) 令和元年度愛知県自然環境保全地域等の追跡調査の結果について

ア 自然環境保全地域

令和元年度の愛知県自然環境保全地域の追跡調査結果について、各専門調査員から追跡調査報告書に基づき報告があった。欠席した専門調査員の報告については、事務局が代読した。また、事務局において指摘に対する回答を行った。

《報告、指摘に対する回答、主な意見等》

① 大沼(北設楽郡豊根村)

(中村専門調査員 報告)

調査した範囲においては、シカの食害で林床には草本がほとんどなく、漆島川沿いの岩場でイワタバコを確認したが、他にはシキミやアセビが確認できる程度であった。シダ植物ではコウヤコケシノブ、オオバイノモトソウ、クマワラビを確認し、コケ植物ではヒノキゴケを確認した。

巡視歩道は一部に痕跡が残されているものの、朽ち果てて分からなくなっている。斜面は崩れやすく、一般の人が入るにはとても危険な状態であり、入山制限をした方がよいと思われる。

また、保全地域を柵で囲んでシカ被害対策をし、植生回復を急ぐ必要がある。

(榊原専門調査員 報告)

(事務局より代読) 漆島川の水生生物を調べたところ、シロハラコカゲロウ、フタスジモンカゲロウ、ヘビトンボ、ヒゲナガカワトビケラ、ウルマーシマトビケラ、アサヒナカワトンボ、ミルンヤンマ、ヤマトクロスジヘビトンボ等の生物が多数種確認された。また、地上では、ツクツクボウシ(鳴き声)、ミンミンゼミ(鳴き声)、キマワリ、アオハナムグリ、キンモンガ、カケス(鳴き声)が確認された。

巡視歩道の荒廃が進んでいるが、人が進入しにくいことは自然環境の保全には好都合なことが多いので、保全に重きを置くのであれば現状のままでもよいように思われる。

(山岡専門調査員 報告)

川沿いには、片理構造が特徴的な領家変成岩(片麻岩、片岩)が露出しており、河原の転石もほとんど変成岩である。このことから、上流地域にも広く変成岩が分布していることが分かる。変成岩から成る漆島川右岸の岸壁にはイワタバコの葉が目立った。巡視歩道の続く山斜面には、所々に変成岩が露出しており、歩道を上りきった830m地点の尾根にも変成岩の転石が見られた。

巡視歩道沿いのスズタケは数年前に一斉に枯れたようで、まだ復活はしていないようである。標高650~700m辺りでは、ナラ枯れしたコナラかミズナラの高木が数本確認された。

巡視歩道は急斜面で足元が悪く、一般の人が歩くには危険である。「登り口」の看板は登山口と間違えやすいため、一般の人が入山しないような表示に替えることが望まれる。

(協議会事務局 指摘に対する回答)

「登り口」の看板は、登山口ではない旨の表示に変更して一般の入山を抑制するようにする。シカの食害については、豊根村と連携して、計画的な捕獲を進めていく。また、環境省の指定管理鳥獣捕獲等事業の利用も検討して、今後も引き続き捕獲圧を高める対策を検討する。

② 壱町田湿地(知多郡武豊町)

(村松調査員 報告)

北側の湿地には、マネキシシジユガヤが群生し、ミカワシシジユガヤが散在していた。ヌマトラノオなども見られた。以前はヒメミミカキグサが群生していたが、時期が少し早かったからか、今回は見つけることができなかった。

中央の広い湿地には、シロバナナガバノイシモチソウの群生が見られ、ぼつぼつと花をつけていたが、以前訪れた時よりも少なくなっているように思われた。トウカイコモウセンゴケ、ミミカキグサも点々と見られた。南と西の林縁には、ヌマガヤ、タイワンカモノハシが増えてきていた。

南側の湿地は、沼地のようで、ヒメガマやコガマの群生地となり、コウホネがわずかに花を咲かせていた。

教育委員会関係やボランティアにより、よく手入れされた湿地が守られており、前回と比べて大きな変化はないと思われる。しかし、周りの樹木がかなり成長して、地下水の減少により乾燥化が進んでいる。

保全のための必要な措置としては、中央湿地内のヌマガヤ、タイワンカモノハシの抜き取り

を今以上に実施し、遊歩道東側の大きなマツの木を伐採する必要がある。また、湧水が湿地に流れるようにするため、湿地西側の樹林地内の低木類を全面的に伐採し、見通せるくらいに明るくする必要がある。

(岡田専門調査員 報告)

アライグマかハクビシンと思われる動物の糞を見つけた。近くの畑で働いていた人の話では、キツネ、タヌキ、ヌートリアがいるとのことであった。その畑には、モグラ類の穴が見られた。

湿地は、前回の様子と大きな変化はなく、良好に保たれていると思われる。今年の台風の影響で大きく崩れた場所があり、補修がされていた。崩落が広がらないように見ていく必要がある。枝が枯れ出してきている樹木もあり、環境改善や湧水を促すため、除伐していく必要がある。北側のアジサイは除去が望ましい。

(中尾専門調査員 報告)

人の手によって管理された保全地域である。北側湿地と南側湿地に流下する湧水の pH は、pH 試験紙で調べたところそれぞれ 5～6 であった。西側の丘陵部を形成する武豊層からは、チャートの中礫や中粒砂が湿地表層部に流出し散在している。北側湿地の西側上部では褐色のシルト層が、散在している礫の間にいくらか露出している。

今年の台風の通過によって、南側湿地上部が一部崩落し、武豊層の礫層が露出していた。そのため、湿地への土砂流入を防ぐための土留めの柵が、武豊町により設置されていた。崩落部分に適切な植栽を行い、崩落部分の土砂流出を防ぐ必要がある。

前回調査の報告にあった北側湿地のアカホヤ火山灰の可能性が高い火山灰層は、確認できなかった。露頭の位置を特定し、試料採取を行い、火山灰の特定をする必要がある。

(協議会事務局 指摘に対する回答)

中央湿地内のヌマガヤ、タイワンカモノハシは、現在刈取りを実施しており、今後状況を見ながら、一部抜き取りを行う予定である。遊歩道東側のマツは、強剪定を予定しており、湿地西側の低木類や枯れ出した樹木は、計画的に間伐、剪定をしていく予定である。

武豊町によると、アジサイは、天然記念物に指定された当初から存在しているとのことなので、除去の必要性を今後検討する。

台風で崩落した場所は注視していく。火山灰層露頭の位置の特定は、資料等がなく困難である。

③ 山中八幡宮 (岡崎市)

(加藤専門調査員 報告)

社叢は高木層にツブラジイを優占種として、クスノキ、リンボク等を伴った常緑広葉樹林が成立しており、林内の低木層にはルリミノキ、ミミズバイ、ヤブツバキ等が生育している。また、参道入り口には、岡崎市指定文化財のクスノキの大木もあり、全体として、自然環境保全地域にふさわしい植生が維持されている。

保全地域を特徴づける植物種のルリミノキは、山頂を中心とした参道沿いで多く確認された。しかしながら、もう一種の特徴づける種のおおふゆいちごは、はっきりと同定できる個体が確認されなかった。送電鉄塔下の草刈り管理された日当たりの良い箇所や、本殿西側の開けた箇所では、おおふゆいちごの特徴に類似した葉質が比較的厚いふゆいちごが確認された。なお、

保全地域指定時の基となったレッドデータブックあいち 2001 が見直しの改訂を受けて、オオフユイチゴは絶滅危惧種ではなくなったので、パンフレット等の説明文の訂正が必要である。

境内で発生した落ち葉や枯れ枝等が、集積して廃棄されていた。集積して廃棄すると、その場所の負荷が高くなるので、時期や場所を分散して廃棄する手段を提案する。また、駐車場の石常夜灯横の標識看板はうっすらと苔生し始めているため、定期的に拭き取り、美化に努める必要がある。

過去の報告では、「特別地区東側で除草剤散布により土手の草本が枯死している」とあったが、除草剤散布・草刈り頻度が減少したと思われ、植生の回復が見られた。鳩ヶ窟の西のヒノキ林には、モウソウチクが依然侵入しているが、他の植生への圧迫は見られなかった。林床植物は、国内山地の各地で問題となっているニホンジカ等の食害が見られず、健全な状態が保たれていた。この森は環境的・文化的価値が高く、引き続き森を守る保全活動の継続が必要である。

(森専門調査員)

なぜ、オオフユイチゴは絶滅危惧種ではなくなったのか。

(瀧崎専門調査員)

オオフユイチゴは、フユイチゴとハウロクイチゴの雑種であり、雑種はレッドリストあいちには含めないこととなった。なお、調査後、採取したオオフユイチゴに近い植物を調べたところ、オオフユイチゴと同定された。ただし、このオオフユイチゴはフユイチゴと交雑しており、どこまでオオフユイチゴとするかは難しい。

(村松専門調査員)

葉質が比較的厚いフユイチゴは、オオフユイチゴとの整理でよいと思われる。

(緒方専門調査員 報告)

(事務局より代読) 社叢はヒメハルゼミの生息地として、市の天然記念物に指定されている。調査日は曇だったが、薄日がさした時間に、ツブラジイの高所でヒメハルゼミの鳴き声が聞けた。姿は確認できなかったが、本殿の石垣に抜け殻を確認した。シダやササ等が茂る環境からは、ユウレイグモやアシナガサragモなど 11 種のクモが確認された。

調査で確認した生物は、鳥類 1 種、両生類 3 種、爬虫類 2 種、昆虫類 12 種、クモ類 25 種、ザトウムシ類 1 種。社叢は自然度が高く、よく保存されていた。

(服部(俊)専門調査員 報告)

(事務局より代読) 参道の階段沿いや巡視歩道には、ところどころに変成岩(領家変成岩類)が露出しており、片理面も観察できる。しかし、どの地点においても風化が進んでおり、良好な岩石として観察できる状況にはない。保全地域の看板は、鳥居の脇をはじめ、随所に設置されており、よく整備されていることが分かる。

保全地域内には、リサイクルステーションとホテルの看板が設置されているので、地域外に移動させる必要がある。

(協議会事務局 指摘に対する回答)

パンフレット等の説明文は正しく訂正する。落ち葉の廃棄方法については、土地所有者に提案内容を伝え対応を依頼した。苔生した看板は拭き取りを実施した。今後も定期的に巡視して、看板の美化にも努めていく。

地域内に設置されたリサイクルステーションとホテルの看板は、地域外に移動するよう管理者に依頼した。

④ 東谷山 (名古屋市)

(中西専門調査員 報告)

(事務局より代読) 東谷山は北部、南西部、南東部が特別地区となっている。北部は主としてスダジイ林で、全体的に乾燥気味であった。

南西部は湧水湿地が見られ、ヌマガヤ群落、シラタマホシクサ群落、シデコブシ群落、ハンノキ群落、サクラバハンノキ群落などが分布していた。シラタマホシクサ群落には、サワヒヨドリ、ヘビノボラズ、ミズギボウシ、オオミズゴケなども生育していた。一見、大変きれいな湿地と感じられた。

南東部は登山道に沿って細長くシデコブシ群落が見られる湿地がある。その中央には沢が流れ、ここを中心に湿地となっている。細長い湿地部分は登山道と山側のヒノキ植林地に挟まれ、両側から圧力を受けていると感じられた。

保全地域全体としては、自然は良好に保たれている。特に北部は問題ないと考えられる。南西部湿地では、アメリカミズキンバイが生えていたので除去することが望ましい。南東部湿地では、山側のヒノキと湿地中のアカメガシワを伐採し、照度を確保する必要がある。中央を流れる沢の掘り込みに注意したい。掘り込みにより乾燥化の原因となっている場所も見受けられる。一角に磁器のかけらの捨て場があるので、撤去する必要がある。

(村松専門調査員)

東谷山では、シカの食害が増え、シダ類が少なくなったと思われる。

(水野専門調査員 報告)

湿地環境保全のために伐採された枝や草が林縁の数カ所に積まれていた。林内にクロクモエダシャク、林縁にチャノコカクモンハマキが多数見られ、生態系のバランスが悪くなっていることが心配された。一方、近年農薬の影響で減少しているアカトンボの一種であるヒメアカネが複数生息していたことは、東谷山の自然環境がそれなりに維持されていること示している。調査では、タイワントビナナフシ、ムネアカハラビロカマキリ (外来種)、ヒメアカネをはじめ、18種類の昆虫が確認された。昆虫種数は多いと思われる。確認された外来種のムネアカハラビロカマキリは1頭である。

遷移が進んだため、林内が暗くなっている。湿地の水量は変化していないようであるが、林床は乾燥が進行しているように思われた。林内の歩道がはっきり判るようになった。草原性のコバネイナゴの個体数が多く、森内まで生息範囲を広げていた。

イノシシの罾が仕掛けてあった。住民によると、イノシシは10年、カモシカは7～8年前から見られるようになったとのことである。

頂上への車道は車が入れないようになっているが、オートバイは入っていける。入口を施錠して車両の進入を禁止しているのであれば、入口の左右にある隙間を塞ぐまたは狭くするなど

の対策をする必要がある。

(吉田専門調査員 報告)

当地域の地形は山地が濃尾平野に落ち込む山稜の南西部に位置し、最も高い標高は198mで名古屋市では最高地である。地質は中・古生層のチャート、砂岩や頁岩などで構成されている。その基盤岩に黒雲母花崗岩が貫入し、接触部では接触変成作用によりホルンフェルスが露出している。花崗岩は風化が進みマサ土化が進んでいる。山地の末端は東海層群の砂礫層やシルト層が分布している。砂礫にはチャートの円礫やホルンフェルスの角礫が含まれている。地形・地質では特に変化はなく、問題もない。

平成26年には、名古屋市が保全地域内の古墳の史跡を整備し、近年、訪れる人が増えている。昨年度、NHK番組「さわやか自然百景」でも放映された。また、林内の乾燥化が進んでいるように思われた。

(協議会事務局 指摘に対する回答)

南西部湿地におけるアメリカミズキンバイは、ボランティア団体が月1回の保全活動の中で除去をしている。南東部湿地は企業の保全協定地域であり、12月の活動で、専門家の指導の下、湿地周辺の常緑樹の除伐をしてもらった。また、磁器のかけらも重点的に撤去してもらった。除伐やゴミ撤去は、同企業の活動で、継続的に実施していく予定である。

オートバイの侵入について、管理者に伝えたと、「鎖で隙間を塞ぐ等の侵入防止対策をしていたが、鎖や鍵を壊されてしてしまう。」とのことであった。については、車止めの場所に、県の制札板を設置することを検討する。

イ 自然環境保全地域候補地

令和元年度の愛知県自然環境保全地域候補地の追跡調査結果について、各専門調査員から追跡調査報告書に基づき報告があった。また、事務局において指摘に対する回答を行った。

《報告、指摘に対する回答、主な意見等》

① 水梨川（北設楽郡設楽町）

(福岡専門調査員 報告)

植生に大きな変化は見られず、良好な環境が維持されていた。空中湿度が高く、イワタバコが広範囲に群落を形成し、シダ植物が豊富に見られた。その他、貴重なものを含め、多種の植物が確認された。

町道は落石があり、車で通行ができなかった。県指定天然記念物のホソバシャクナゲ自生地まで行ったが、ホソバシャクナゲは目視できる範囲には全く見られず、斜面を登って確認しようとしたが急峻で崩落が激しかったり、滝に阻まれて登ることはできなかった。詳細な再調査が必要であると考えた。

上流の採石場付近は川の水が濁っている印象も受けるが、下流では澄んだ水が流れていて良好な環境であった。この状況を維持できるとよい。また、近年、シカによる食害が広範囲にみられるが、本調査地では食害による植物の消失は無いように感じられた。この状況を維持できるとよい。

(服部(伸)専門調査員 報告)

調査では15種類の野鳥を確認した。ただ、40年前の調査報告でも記されているように、個体密度はさほど高くなく、種数も多くない。当調査地のような深い谷間の森よりも明るい雑木林の方が、個体密度も種数も多い印象である。

以前の報告にあったムカシトンボは見つからなかったが、ムカシトンボ幼虫を探すためにひっくり返した石には多数の昆虫の幼虫が確認され、生物にとってよい環境であると思われた。確認された生物の状況等から、水梨川はかなり長期にわたり、安定した環境を維持してきたと考えられる。流域に数多くある砂防堰堤も、時を経て自然の中に溶け込んでいるように見えた。

保全のための必要な事項としては、解説板・制札板の新設、散見される不法投棄の撤去が考える。

(原瀬専門調査員 報告)

当保全地域候補地は、地形的には、水梨川が削剥した極めて急峻な地形で下刻が進んでいる。地質的には、日本の広域変成帯の一つである領家帯にあたる。また、新生代新第三紀に活動した設楽層群の北端部にあたり、火山活動により堆積した火砕岩類やその後の貫入岩類が分布する。

当地域内では、領家変成岩類の片麻岩がほとんどを占め、その岩質は、チャート起源の珪質片麻岩（一部、砂岩起源の砂質片麻岩）であり、特徴的に片理面で割れやすく崩れやすい。地域東端部には、設楽層群南設楽層群に分類される大峠累層の主に流紋岩質火砕岩類が分布しており、珪質片麻岩の分布域との境界付近には、珪化安山岩が、約N40° W55° Sの走向傾斜で貫入している。そこより、西側では、安山岩質の貫入岩が、約N40° ~70° E50° ~70° Nの走向傾斜で、珪質片麻岩を貫き、平行岩脈群を形成している。

当地域を構成する地形・地質に関しては、特に大きな変化はない。福岡調査員が行った時期にあった町道の落石は、撤去されていた。しかし、トタン板、スチロール板、冷蔵庫、農業用ビニールシート等が、主に水梨川と町道の間の数か所において投棄されており、投棄されたゴミの撤去、投棄を禁止する看板の設置が必要である。解説板・制札板の新設も必要と考える。

(協議会事務局 指摘に対する回答)

県指定天然記念物のホソバシャクナゲ自生地は、分かりにくい場所にある。文化財保護指導委員が、今年度に自生地を2回確認しており、生育状況は良好との報告を受けている。

不法投棄については、管理者の設楽町に状況を伝え撤去を依頼した。不法投棄禁止看板の設置は、設楽町と協議して検討する。当地域は自然環境保全地域候補地であるため、解説板・制札板の設置は難しい。

ウ すぐれた自然地域

令和元年度のすぐれた自然地域の追跡調査結果について、各専門調査員から追跡調査報告書に基づき報告があった。欠席した専門調査員の報告については、事務局が代読した。また、事務局において指摘に対する回答を行った。

《報告、指摘に対する回答、主な意見等》

① 財賀寺（豊川市）

(瀧崎専門調査員 報告)

素晴らしいツブラジイの極相林が維持されている。尾根近くにはアカガシも混じる。ツブラジイの原生林には、希少な植物が多く見られる。

駐車場脇の沢沿いには、以前はホソバノコギリシダの群落が見られたが、その後の沢の増水などにより群落が削り取られたようで、現在は確認できない。代わりに暖地性のアマクサシダが良好な群落を形成していた。以前はあまり見られなかった、暖地性のナガバノイタチシダやオオバノアマクサシダも個体数が増えている。ところがそこから10mほど登ったところでは、冷温帯要素といってよいイヌガンソクの大株が見られる。自然状態は非常に良く保たれていると考えられる。なお、カモシカは生息しているが、シカの生息は見られず、食害は少ない。

スギの植林地では、林床を外来種のコンテリクラマゴケが被っている。ヤブミョウガなどの草丈の高い植物が繁茂し始めているので、徐々に衰退すると思われる。植林された杉林そのものにはあまり手が入れられていない。

本堂前の池にはコウホネが植栽されている。おそらく植栽だが、相当な年月ここにあるものと思われる。もしかしたら自生かもしれない。

極相林となっているツブラジイの原生林は、できる限り手を着けずに保全したい。外来種はコンテリクラマゴケが気になるが、自然林への逸出はほとんどないようなので、このまま様子を見るのが良いと思う。

(木村専門調査員 報告)

(事務局より代読) 雨天の中、林縁部と人気(ひとけ)のある植え込み周辺を調査した。強い降雨で陸産貝類の活性は高く、マメマイマイ、オオケマイマイという今まで記録のない2種の生息が確認された。マメマイマイは分類的な再検討が必要な種群で、近年では三重県鳥羽市日和山をタイプ産地とするニオヤカマイマイと同種とされることも多い殻径1cm程の小型のマイマイ類である。コンクリート壁にはイセノナミマイマイ(ヒラマイマイの1型)、茂みには大型のナメクジ類のヤマナメクジ、林縁部の倒木にはツムガタモドキギセルの生息が認められた。

自然林内を詳しく見たわけではないが、周辺から観察する限り、台風で倒壊した大木以外は特に変化を確認できなかった。道沿いの林縁部を含めた自然林並び古い杉の植林の保全を今度とも期待したい。現時点で保全に必要なことは時にない。

(森専門調査員 報告)

財賀寺周辺の地質は、北側に位置する観音山(標高397m)、北東側に位置する本宮山(標高789m)などと同様、中生代白亜紀の領家変成コンプレックスに属している。財賀寺が立地する山体は、岩石的には変成砂岩及び変成珪質岩で構成されている。前者は砂質グラノフェルスないしは砂質片麻岩、後者は含黒雲母石英片麻岩と呼ばれるものである。仁王門より参道を登り本堂に至る間、参道上及び参道周辺の小露頭で砂質グラノフェルス(砂質片麻岩)を観察することができる。この岩石は、風化するとろくなり、雨水の浸食を受けやすい特徴がある。また、参道階段や寺一帯に構築されている石造建造物にもこの岩石が使用されており、とても良いことである。今後もこうした方針が貫かれるよう希望する。

本堂東方には谷地形が発達しており、雨水による下方浸食が進行中であることが明らかになった。土石流発生が懸念されるので、保全のために何らかの対策が必要である。

財賀寺は、本県の自然環境保全のうえで、すぐれた自然地域として極めて重要である。

(協議会事務局 指摘に対する回答)

財賀寺の住職に調査内容を伝え、境内の自然環境の保全や、石造工作物への砂質グラノフェルスの使用について協力を依頼した。また、土石流発生防止のための対策については、寺として何らかの対策を考えたいので、専門的見地から助言をもらいたいとの申し出があった。

(森専門調査員)

では、対策方法等について、私の考えを住職に伝えたいと思う。

(2) 研究発表

・原瀬専門調査員（地形・地質部門）から「奥矢作湖周辺の武節花崗岩の岩石学的研究」について、研究発表がなされた。

(3) その他

・次回の令和2年度第1回専門調査員協議会については、植物部門の専門調査員が研究発表を行うこととなった。

・愛知県環境審議会専門調査員協議会の会議録については、愛知県環境審議会運営規程第7条第1項の規定に基づき、岡田専門調査員（動物部門）及び吉田専門調査員（地形・地質部門）が署名者に選出された。